

「実践看護学演習」の効果についての考察 ～模擬患者 (Simulated patient または Standardized patient : SP) を導入して～

園田 麻利子, 福岡 真理, 奥平 綾美, 七川 正一

要 旨

【目的】 実践看護学演習の効果について考察するとともに、次年度以降の演習・実習に役立てることを検討する。

【方法】 調査対象者は、A 大学看護栄養学部看護学科 3 年次生 54 名に自己記述式質問紙調査を実践看護学演習後、健康回復支援実践 (基礎・応用) の実習終了後で 3 回実施した。調査項目は、筆者が作成した測定項目 (演習の自己評価 23 項目と模擬患者 (以下 SP とする) に対する思い 16 項目)、また、SP を活用するメリット・デメリットへの考えたことの自由記述であった。

【結果および考察】 結果は自己評価・SP に対する思いの分析において高得点が得られた。また、SP を活用することのメリット・デメリットの記述の分析において【SP の存在からの学び】が得られた。これらのことは、「実践看護学演習」の効果であり演習の中に SP を導入したことも効果的であったと言えた。本演習はシミュレーション教育の実施と言え、今後はシチュエーション・ベースド・トレーニングを踏まえた演習を実施したいと考える。また、現在の看護教育が直面する課題の解決のためのカリキュラム全体の充実・教育方法のさらなる検討が必要であると考えられる。

キーワード： 実習前演習, 演習の効果, SP の導入, シミュレーション教育

I はじめに

看護教育には、講義・演習・実習という教育の形態がある。看護教育の特徴は、実習の期間が長く、学びの重要な位置を占めていることである。以前は、看護が対象とする患者・家族が健康障害を生じた場合、施設内 (病院) で治療・看護が完結し、その後在宅というケースがほとんどであった。そのため実習は施設内 (病院) の比重が高かったが、ここ 10 数年、医療・看護の現場は目まぐるしく変化している。入院期間の短縮、患者の高齢化、医療安全の意識の高まりにより臨地実習の場における体験学習が困難になってきている。岡谷¹⁾ は「実習期間中に 1 人の患者を受け持つ、じっくりと関係性を築きながら、学生の学習スピードに合わせて実習を行うという従来の方法が機能しない。今では、実習期間中に複数の患者を受け持つことが当たり前になりつつあり、治療や回復のスピードに学生の学習が追いつかない状況をもたらしている。実習目標を達成するのに適した受け持ち患者を選択することが難しい。また、患者や家族の権利意識の向上や短期間での集中的な治療により、学生が受け持ちを断られることが増えている。そして、医療安全や倫理の観点から、学生が患者に直接、侵襲性を伴う看護行為を行うことができなくなっている。このような課題に対応し、学生の経験学習とおした実践能力の習得を

支援するために、シミュレーション教育の導入が効果的である」と述べている。

阿部²⁾ はシミュレーション教育を次のように定義している。実際の臨床の場や患者などを再現した学習環境のなかで、学習者が課題に対応する経験や振り返りやディスカッションを通して、「知識・技術・態度」の統合を行うことにより、反省的実践家を育てていく教育としている。また、阿部³⁾ は医療におけるシミュレーション教育とは、「実際の患者に提供される医療を想定して学習者に教材を提供し、医療者として必要なテクニカルおよびノンテクニカルな能力の向上を目指すもの」と述べている。その効果は大きく有効な教育方法の 1 つとなっている。

以上のことから施設内 (病院) と同様な実習環境を整え、学内演習を実施することが教育効果を高めると考える。演習の定義を杉森⁴⁾ は、「座学や一斉授業に代表される講義形態では修得困難な教育内容に対して用いる多様な教育方法と規定する」と述べている。学内演習を効果的に実施するのは、シミュレーション教育の実施の中で、患者役割を担う模擬患者 (Simulated patient または Standardized patient : SP) の存在が有効である⁵⁾ と言われている。

本学では平成 23 年度より 3 年次生の領域別実習の前に学内で「実践看護学演習」を実施してきた。その目的は、「これまで学んだ全ての知識や技術を統合させ看護過程を実践的に展開することで、個別性を踏ま

えた看護実践、対人関係能力を養う。また、看護学生として基本的態度・心構え、基本的倫理・ルール、コミュニケーションを身に付ける。それらを通しての学びと自己の課題の考察をする」であった。演習で取り扱う事例は肝硬変・脳梗塞など様々であり、患者役割を教員が担うように計画したが困難であり、またコロナ禍での演習では、演習の内容が均一化されない状況が生じていた。

そこで、令和3年度は、2年次後期の開講科目である「看護診断学」と連携し胃がんの術後の事例を使用した。これは、アセスメント・初期計画は立案されており、今回の演習では学生が立案した初期計画を基に実施・評価を中心に実施した。昨年に引き続きコロナ禍の影響もあったが、可能な限り病室に近い環境を整え、SPを活用し演習内容も均一化するようにした。

本研究の目的は、これらの学内演習の効果について考察するとともに、次年度以降の演習・実習に役立てることである。

II 目的

「実践看護学演習」の効果について考察するととも

に、次年度以降の演習・実習に役立てることである。

III 実践看護学演習の教育課程における位置づけ、演習の目的・目標

実践看護学演習の教育課程における位置づけ、演習の目的・目標を表1に示した。

A大学の教育課程は、基礎教育科目と専門教育科目で系列されている。専門教育科目は、看護の基盤となる領域、看護の軸となる領域、実践力を発揮する領域の3領域で構成されている。その1つである実践力を発揮する領域は、主に臨地での領域別実習であり、本演習は学内ではあるが、この領域である。実践看護学演習の目的・目標を表2、また、授業の展開を表3に示した。本演習は、全体のオリエンテーション・その後のグループワークが2コマ、胃がんの事例に関する演習が14コマ、老年（在宅）・こども看護実践に関する演習が各3コマ、自己の学びと課題の発表、その後の教員との面談・評価が1コマの23コマで構成されている。

本研究は、胃がんの事例に関する演習（14コマ）を考察するものである。

表1 実践看護学演習の教育課程における位置づけ

専門教育科目	実践力を発揮する領域	実践看護学演習 看取りの看護 看護トピックス
	看護の軸となる領域	人間の発達 健康の科学 生活の支援
	看護の基盤となる領域	ヒューマンケアリング 社会制度倫理 看護論 看護技術
基礎教育科目	情報を活用し表現力を高める領域	情報技術 表現技術
	人間的成長を促す領域	女性発達学 看護の精神 プロジェクトJ

表2 実践看護学演習の目的・目標

演習目的	これまで学んだ全ての知識や技術を統合させ看護過程を実践的に展開することで、個別性を踏まえた看護実践、また対人関係能力を養う。看護学生として基本的態度・心構え、基本的倫理・ルール、チームで協同するために必要なコミュニケーションを身に付ける。また、学びと自己の課題を考察できる。
演習目標	(1) 看護学生として臨地実習で求められる基本的態度や心構えを理解し、実践できる。 (2) 看護学生として臨地実習で求められる基本的倫理やルールについて理解し、実践できる。 (3) 事例（教員・学生・SP（模擬患者）が患者役割を設定する場合を含む）に対してこれまで学んだ全ての知識や技術を統合させ、必要な看護を判断し援助が実践できる。（看護過程を実践的に展開することができる。） (4) 臨地実習を行う上で必要となる思考過程と基本技術を確認し、身に付けることができる。 (5) 臨地実習を行う上で必要となるコミュニケーションを身に付けることができる。 (6) 本演習の実践を踏まえ、学びと自己の課題を明確にすることができる。

表3 授業の展開

全体オリエンテーション・その後のグループワーク	2コマ
胃がんの事例に関する演習	14コマ
老年看護実践（在宅看護）に関する演習	3コマ
こども看護実践に関する演習	3コマ
自己の学びと課題の発表，面談・評価	1コマ

IV 研究方法

- 1 研究対象者：A大学 看護学科「実践看護学演習」に参加した看護学科3年次生54名
- 2 無記名の自己記述式質問紙調査：質問紙は，
 - 1) 演習をどのように取り組んでいるかを振り返り，学習を効果的に進めたかについての自己評価23項目
 - 2) SPに対する思い16項目，これは，先行研究をもとに筆者が作成したもの
- 3 研究時期：
 - 1) 1回目：2021年7月15日
 （「実践看護学演習」の演習終了後：以後演習終了後とする）
 - 2) 2回目：2021年9月24日，10月1日，10月29日
 （健康回復支援実践（基礎）終了後：以後基礎実習終了後とする）
 - 3) 3回目：2021年11月19日，11月26日，2022年1月28日
 （健康回復支援実践（応用）終了後：以後応用実習終了後とする）
- 4 調査項目：
 - 1) 演習をどのように取り組んでいるかを振り返り，学習を効果的に進めたかについての自己評価23項目（以後自己評価とする）
 - 2) SPに対する思い16項目
 - 3) SPを活用するメリット・デメリットへの考えたことの自由記述
- 5 分析方法：

リッカート尺度の5段階尺度を用い，「非常に当てはまる」5点，「かなり当てはまる」4点，「大体当てはまる」3点，「あまり当てはまらない」2点，「まったく当てはまらない」1点とした。

分析には，SPSS18.0Jを使用し，有意水準5%で有意差ありとした。

 - 1) 演習終了後・基礎実習終了後・応用実習終了後の3回の調査の信頼性の検討
 3回の調査の内的信頼性について，クロンバッハの α 係数による検討
 - 2) 演習終了後，基礎実習終了後，応用実習終了後における質問項目の平均値の比較
 - 3) 演習終了後，基礎実習終了後，応用実習終了後における質問項目の平均値の有意差（Kruskal Wal-

lis 検定)

- 4) SPを活用することのメリット・デメリットの記述を意味内容の近いものを集めて類似した内容をまとめてカテゴリー化した。

6 倫理的配慮

研究対象者に研究の趣旨および方法，研究参加を断っても成績には一切関係のないこと，研究以外の目的でデータを使用しないこと，得られたデータは個人が特定されないよう配慮する旨を伝えた。本研究は，学会等で公表することがある。以上のことを説明し，質問紙への回答および提出をもって本調査への同意とした。A大学倫理委員会にて承認を受けた。

V 演習の内容

- 1 演習内容
 演習概要・演習内容を表4・5に示した。
- 2 演習の具体的な流れと方法
 - 1) 教員へのオリエンテーションでは，演習の目的・目標，内容，日程，評価方法，グループメンバーについて説明し，議論した。
 - 2) SPは看護師とした。SPのオリエンテーションでは，演習前に演習の目的・目標，内容，日程，全員のSPが患者を共通認識できるように授業で使った胃がん患者のDVDを聴取し患者になりきることを説明した。各演習の終了後に振り返りと次回の打ち合わせを実施した。
 - 3) 学生へのオリエンテーションは，「実践看護学演習」の1・2回目に実施した。そこで，演習の目的・目標，内容，日程，評価方法，グループメンバーについて説明した。グループで胃がんの事例の看護過程に関して共通認識し，グループでの約束・ルールを決定した。
 - 4) グループメンバーは，2年次の実習を基本に構成し1グループ5～6名とした。1グループに一人の教員を配置した。演習内容は，表5に示したように「観察」「離床」「清潔ケア」とし，これらの看護をSPに対して看護師役が実施した。他の学生は，観察者役とした。また，できるだけ病室環境に近いようにし，器具・機材・創部・ドレーン・点滴類はできるだけ現実に沿うように設定した。看護の実施終了後，SP・教員を交えて振り返りを実施した。毎回の演習終了後に振り返り用紙の提出，実施した看護についての実施・評価の提出を求めた。
 - 5) 全ての演習の終了後に「本演習の実践を踏まえて学びと自己の課題が明確にできる」ことを目的に3分程度，学生一人ずつ発表させた。
 - 6) 発表後に演習を振り返り，教員との面談のなかで自己の課題を明確にし，評価をした。

表4 胃がんの事例に関する演習の概要

<p>1) 2年次後期に学んだ急性期の事例（胃がん）の看護過程の展開に基づき、「実施・評価」に重点をおいた演習を行う。</p> <p>2) 学生は、看護師役を体験しながら初期計画で立案したものを実施し、その看護を振り返り評価する。初期計画に追加・修正を加え、看護過程の展開の実際を体験することによってその思考を理解する。</p> <p>3) 1) 2) を実施する中で、事例に応じて既習のクリティカル・看護診断学・現在学習中のがんを病む人の援助論・援助技術論等で学んだ知識・技術を統合することの必要性を理解し実施する。</p>

表5 胃がんの事例に関する演習の内容

<p>1) (1) 胃がん患者 (SP) に対して下記の看護を実践する。</p> <p style="padding-left: 2em;">A: 観察・・・バイタル, 創部, ドレーン・硬膜外チューブ, インアウト, 点滴の滴下の観察, 滴下数などの実施</p> <p style="padding-left: 2em;">B: 痛みに関する看護</p> <p style="padding-left: 2em;">C: 離床に関する看護・・・歩行等 離床の実施,</p> <p style="padding-left: 2em;">D: 清潔ケアの実施</p> <p>(2) (1) の実施の中で、診断名・目標・計画が立案されている。それらを実施と結びつける。</p> <p>(3) (1) の実施の中で、患者の反応を確実にとらえる。</p> <p>(4) (1) を実施する中で、看護過程が展開することを理解する。</p> <p>2) 2～3G 合同でプレゼンテーションを実施する。</p>
--

VI 結 果

1 対象者数と回収率

1 回目は、26 名（有効回答率 48.1%）、2 回目は、47 名（有効回答率 87.0%）、3 回目は、41 名（有効回答率 75.9%）、であった。対象者は、19 歳～22 歳、ほとんどが高校卒業後大学に進学した学生で臨床経験はなかった。

2 演習終了後・基礎実習終了後・応用実習終了後の 3 回の調査の信頼性

3 回の調査の尺度の信頼係数は、クロンバッハの α 係数で検討した。演習後、基礎実習終了後、応用実習終了後の信頼係数 α は、順に 0.844, 0.891, 0.821 と高く、内的整合性は得られていた。

3 演習終了後・基礎実習終了後・応用実習終了後の 3 回の調査の分析

1) 自己評価についての分析

3 回の調査の自己評価についての 23 項目（調査項目 1～23）の平均値とその標準偏差を表 6 に示した。

演習終了後の平均値で得点が高かったのは、調査項目 12 の「清潔感のある身だしなみ、挨拶、笑顔、気配り・約束を守ることができた」 4.81 ± 0.49 であり、この項目は、基礎実習終了後・応用実習終了後も $4.83 \pm 0.52 \cdot 4.93 \pm 0.26$ と高得点であった。演習終了後では、調査項目 21 「自ら発信する、相手の話を素直に聞く、相手の意見・助言を受け止めることができた」 4.81 ± 0.49 で調査項目 12 と同得点であった。次に高得点であったのは、基礎実習終了後では、調査項目 18 「プライバシーに配慮したケアができた」 4.81 ± 0.40 、応用実習終了後では、調査

項目 13 「教員やメンバーに連絡・報告・相談ができた」であった。

次に、演習終了後の平均値で得点が低かったのは、調査項目 5 の「実施の計画発表・実施後の報告が適切にできた」 3.50 ± 0.91 であり、この項目は、基礎実習終了後・応用実習終了後も $3.89 \pm 0.90 \cdot 3.98 \pm 0.82$ と低得点であった。次に低得点であったのは、演習終了後では、調査項目 6 「観察の結果や対象の反応（実施中・実施後）の意味を考えて評価することができた」 3.77 ± 0.65 、調査項目 7 「看護目標に到達した場合または到達しなかった場合、その要因についてアセスメントすることができた」 3.77 ± 0.65 であった。基礎実習終了後では、調査項目 7 「看護目標に到達した場合または到達しなかった場合、その要因についてアセスメントすることができた」 4.11 ± 0.77 、応用実習終了後では、調査項目 8 「必要に応じてアセスメント・看護診断・看護目標・看護計画のどこに戻ればよいか・どこを修正すればよいか理解できた」であった。

3 回の調査で有意差を認めた項目は、調査項目 4 「対象の反応を観察しながらその方法で良いか考えながら実施することができた」 P 値 = $0.002 < 0.05$ 、調査項目 6 「観察の結果や対象の反応（実施中・実施後）の意味を考えて評価することができた」 P 値 = $0.002 < 0.05$ 、調査項目 7 「看護目標に到達した場合または到達しなかった場合、その要因についてアセスメントすることができた」 P 値 = $0.045 < 0.05$ 、調査項目 19 「対象への苦痛を考え、苦痛を軽減したケアができた」 P 値 = $0.025 < 0.05$ の 4 項目であった。

表6 3回の調査における自己評価の平均値

	演習終了後 (n=26)	基礎終了後 (n=47)	応用終了後 (n=41)	有意差
1 対象にとってその援助がどうしても必要なのか理解できた	4.38 ± 0.64	4.64 ± 0.53	4.56 ± 0.55	
2 対象にとってその観察がどうしても必要なのか理解できた	4.50 ± 0.65	4.68 ± 0.52	4.59 ± 0.59	
3 対象に適した具体的な目標を意識しながら実施することができた	4.19 ± 0.69	4.36 ± 0.71	4.20 ± 0.68	
4 対象の反応を観察しながらその方法で良いか考えながら実施することができた	3.81 ± 0.69	4.38 ± 0.71	4.39 ± 0.70	*
5 実施の計画発表・実施後の報告が適切にできた	3.50 ± 0.91	3.89 ± 0.90	3.98 ± 0.82	
6 観察の結果や対象の反応(実施中・実施後)の意味を考えて評価することができた	3.77 ± 0.65	4.32 ± 0.76	4.35 ± 0.58	*
7 看護目標に到達した場合または到達しなかった場合、その要因についてアセスメントすることができた	3.77 ± 0.65	4.11 ± 0.77	4.20 ± 0.60	*
8 必要に応じてアセスメント・看護診断・看護目標・看護計画のどこに戻ればよいか・どこを修正すればよいか理解できた	4.00 ± 0.800	4.22 ± 0.70	4.07 ± 0.72	
9 看護の実施にあたり、どのような情報が必要か理解できた	4.31 ± 0.62	4.47 ± 0.65	4.22 ± 0.73	
10 アセスメントが看護の実施に与える影響を理解できた	4.19 ± 0.69	4.45 ± 0.62	4.46 ± 0.67	
11 本演習の実践を踏まえて学びと自己の課題が明確にできた	4.50 ± 0.58	4.45 ± 0.65	4.41 ± 0.63	
12 清潔感のある身だしなみ、挨拶、笑顔、気配り・約束を守ることができた	4.81 ± 0.49	4.83 ± 0.52	4.93 ± 0.26	
13 教員やメンバーに連絡・報告・相談ができた	4.73 ± 0.60	4.70 ± 0.59	4.78 ± 0.42	
14 予習・復習をした上で演習に臨むことができた	4.35 ± 0.69	4.15 ± 0.75	4.44 ± 0.63	
15 毎日の演習の目標を明確にし、意欲的に演習に取り組む(疑問を抱く・質問をする・自分の考えを述べるなど)ことができた	4.50 ± 0.65	4.39 ± 0.68	4.34 ± 0.66	
16 日々の振り返り(記録の提出・修正も含む)ができた	4.69 ± 0.55	4.62 ± 0.61	4.71 ± 0.56	
17 対象への適切な言葉遣いや内容の会話ができた	4.58 ± 0.58	4.70 ± 0.51	4.73 ± 0.50	
18 プライバシーに配慮したケアができた	4.50 ± 0.65	4.81 ± 0.40	4.68 ± 0.57	
19 対象への苦痛を考え、苦痛を軽減したケアができた	4.04 ± 0.72	4.49 ± 0.66	4.37 ± 0.62	*
20 時間厳守・提出物の期限の厳守、遅刻・欠席をしないことを守ることができた	4.77 ± 0.51	4.77 ± 0.67	4.76 ± 0.80	
21 自ら発信する、相手の話を素直に聞く、相手の意見・助言を受け止めることができた	4.81 ± 0.49	4.66 ± 0.60	4.63 ± 0.62	
22 グループメンバーと協力しあうことができ、メンバーとして役割を果たすことができた	4.62 ± 0.70	4.53 ± 0.69	4.76 ± 0.44	
23 2グループによるプレゼンテーションによって学びを深めることができた	4.64 ± 0.70	4.64 ± 0.57	4.71 ± 0.56	

* P < 0.05

2) SP に対する思い

3回の調査のSPについての16項目(調査項目24~39)の平均値と標準偏差を表7に示した。

演習終了後の平均値で得点が高かったのは、調査項目37の「コミュニケーションの重要性を理解した」5.00 ± 0.00であり、この項目は、基礎実習終了後・応用実習終了後においても4.77 ± 0.48・4.90 ± 0.30と高得点であった。次に高得点であったのは、調査項目38「アセスメントの重要性を理解した」4.85 ± 0.46であり、この項目は、基礎実習終了後・応用実習終了後においても4.67 ± 0.52, 4.90 ± 0.30と高得点であった。

次に、演習終了後の平均値で得点が低かったのは、調査項目25の「自分が描いていた対象特性のイメージとギャップがあった」3.50 ± 1.21であり、この項目は、基礎実習終了後・応用実習終了後も3.29

± 1.18・3.44 ± 1.07と低得点であった。次に低得点であったのは、演習終了後では、調査項目28「過度の緊張があり効果的な学びとならなかった」3.92 ± 1.20(逆転項目)であり、この項目は、基礎実習終了後では3.98 ± 1.24, 応用実習終了後では、3.27 ± 1.32であった。3回の調査で最も得点が低かったのは、調査項目33「援助での失敗体験をした」2.89 ± 1.28であった。

3回の調査で有意差を認めた項目は、調査項目28「過度の緊張があり効果的な学びとならなかった」P値 = 0.007 < 0.05, 調査項目32「計画通りにいかない体験をした」P値 = 0.004 < 0.05, 調査項目33「援助での失敗をした」P値 = 0.001 < 0.05, 調査項目37「コミュニケーションの重要性を理解した」P値 = 0.032 < 0.05, 調査項目38「アセスメントの重要性を理解した」P値 = 0.035 < 0.05の5項目であった。

表7 3回の調査におけるSPに対する思いの平均値

	演習終了後 (n=26)	基礎終了後 (n=47)	応用終了後 (n=41)	有意差
24 臨場感のある体験ができた	4.54 ± 0.76	4.24 ± 0.91	4.24 ± 0.89	
25 自分が描いていた対象特性のイメージとギャップがあった	3.50 ± 1.21	3.29 ± 1.18	3.44 ± 1.07	
26 患者のイメージ化に有効であった	4.38 ± 0.70	4.00 ± 0.89	4.29 ± 0.84	
27 いつもと違う緊張感があった	4.77 ± 0.59	4.45 ± 0.76	4.49 ± 0.75	
28 過度の緊張があり効果的な学びとならなかった(*)	3.92 ± 1.20	3.98 ± 1.24	3.27 ± 1.32	*
29 リアルなフィードバックがあった	4.27 ± 0.87	4.16 ± 0.89	4.39 ± 0.80	
30 フィードバックをネガティブに受け止め効果的な学びでなかった(*)	4.08 ± 1.16	4.21 ± 1.20	4.00 ± 1.342	
31 援助の難しさを実感した	4.58 ± 0.58	4.35 ± 0.78	4.63 ± 0.58	
32 計画通りにいかない体験をした	4.38 ± 0.94	3.53 ± 1.16	4.10 ± 1.04	*
33 援助での失敗体験をした	4.00 ± 1.020	2.89 ± 1.28	3.60 ± 1.22	*
34 対象の反応を捉え援助することの重要性を理解した	4.69 ± 0.62	4.57 ± 0.73	4.66 ± 0.58	
35 基本的な看護技術習得の重要性を理解した	4.81 ± 0.40	4.64 ± 0.61	4.78 ± 0.48	
36 学習への動機づけとなった	4.62 ± 0.50	4.61 ± 0.58	4.68 ± 0.57	
37 コミュニケーションの重要性を理解した	5.00 ± 0.00	4.77 ± 0.48	4.90 ± 0.30	*
38 アセスメントの重要性を理解した	4.85 ± 0.46	4.67 ± 0.52	4.90 ± 0.30	*
39 自己の課題が明確になった	4.81 ± 0.40	4.59 ± 0.622	4.66 ± 0.53	

* P < 0.05 28, 30(*)は逆転項目

4 SPを活用することのメリット・デメリットの記述の分析

演習終了後に記述したSPを活用することのメリット・デメリットの記述の分析を表8・9に示した。

1) メリットの記述の分析

61件の記述があった。

カテゴリーを【】, サブカテゴリーを《》, 記述を「」で示した。【SPの存在からの学び】、【演習環境の評価】、【実習への活用】、【看護の実際に関する学び】の4つのカテゴリーを抽出した。【SPの存在からの学び】が23件と最も多く、次に【演習環境の評価】が18件と続いた。【SPの存在からのまなび】は、《SPからの助

言》《学生同士では得られない体験》《患者になりきれるSP》《患者の状況の理解》《SPの助言後の演習への取り組み》の5つのサブカテゴリーを抽出した。【演習環境の評価】は、《ほどよい緊張感》《リアルな体験》《演習の環境・計画の評価》の3つのサブカテゴリーを抽出した。【実習への活用】は、《実習のイメージの描き》《実習への役立て方》《自分の思い》の3つのサブカテゴリーを抽出した。【看護の実際に関する学び】は、《コミュニケーションに関する学び》《技術の学び》《実施評価の書き方》《接遇》の4つのサブカテゴリーを抽出した。

表8 SPを導入することのメリットの記述

カテゴリー (記述数)	サブカテゴリー
SPの存在からの学び (23)	SPからの助言
	学生同士では得られない体験
	患者になりきれるSP
	患者の状況の理解
	SPの助言後の演習への取り組み
演習環境の評価 (18)	ほどよい緊張感
	リアルな体験
	演習の環境・計画の評価
実習への活用 (14)	実習のイメージの描き
	実習への役立て方
	自分の思い
看護の実際に関する学び (6)	コミュニケーションに関する学び
	技術の学び
	実施評価の書き方
	接遇

表9 SPを導入することのデメリットの記述

時間帯の変更がすぐできない 事例は男性なのに女性であったこと (3) 看護師だったから少し怖かった 準備に時間がかかる
--

2) デメリットの記述の分析

6件の記述があり、「事例は男性なのに女性であったこと」が3件と最も多かった。また、SPは全員女性の看護師経験者であり「看護師だったから少し怖かった」ということであった。

VI 考 察

1 実践看護学演習の効果

実践看護学演習は、演習終了後・基礎実習終了後・応用実習終了後の23項目の自己評価が高得点であったことより効果的であったと言えた。また、SPを初めて導入したことは、16項目のSPに対する思いが高得点であったことより効果的であったと言えた。

次に、SPを導入することのメリットの記述の分析においてもSPの導入が効果的であったと言えた。【SPの存在からの学び】の記述がもっとも多く、《SPからの助言》では、「SPさんの経験などを聞けることで実践的な学びができた」、《学生同士では得られない体験》では、「学生同士ではないため本物の患者さん同様のコミュニケーションをとることができた」、《患者になりきれるSP》では、「対象になりきっていたため、良い反応も悪い反応も経験することができた」と記述していた。また、そのような《患者になりきれるSP》の存在がある演習を体験し、「SPさんが毎回どのような発言をするかわからないため事前にいろいろなことを想定して課題にとり組めた」と《SPの助言後の演習への取り組み》は瞬時に患者への対応を変化させていた。【演習環境の評価】では、《ほどよい緊張感》《リアルな体験》ができて良かったと効果的であったことを評価していた。SPを導入した実践看護学演習は、効果的であったと言えた。

2 SP導入の効果とシミュレーション教育の導入

看護教育現場が直面している課題には、臨床現場を取り巻く状況の変化、教育方法、学習者の特徴、求められる実践力のギャップの4つがあげられる。これらの課題を克服する1つの手段としてシミュレーション教育が目ざされていると小西⁶⁾は述べている。これに加えて、実習施設の持たない本学では実習環境を整えることに苦心している状況があり、新型コロナ禍でもあり臨地実習での学びが困難であり現行の教育方法の在り方の見直しが必要であると思われる。看護教育では、講義・演習・実習という教育形態で実習での体験は大きな学びの位置づけであるが、その一角が不十

分となると臨地での実習に代わる教育、またはそれを補う教育が必要となる。

シミュレーション教育の導入の目的を佐々木⁷⁾は『学生の臨床判断能力の強化』が最も多く、次いで『実習への導入準備教育』、『コミュニケーション能力の強化』、『主体性の強化』と続いていた。」としている。これからすると本演習は、「実習への導入準備教育」「コミュニケーション能力の強化」を目的としたシミュレーション教育と言える。

再現性・忠実性からみたシミュレーションの特徴としてケーススタディ、ロールプレイ、タスク・トレーニング、コンピュータシミュレーション、模擬患者、フルスケールシミュレーションがある。再現性・忠実性をもっともひくいはケーススタディやロールプレイ、もっとも高いのはフルスケールシミュレーションであると小西⁸⁾は述べている。シミュレーション教育の方法は多々あり、教育を受ける対象学生の状況に応じて教育目標・成果を明確にし、段階的に取り組まなければならない。

本演習では従来はロールプレイで実施しており、学生が患者役・看護師役を担っていた。学生が患者役をすると知識・技術の不足があり患者役になりきることが困難であると判断し、患者役は教員に依頼したが徹底しなかった。これらの経過を経てSPを導入したことは、再現性・忠実性が段階的に高くなってきたと言える。模擬患者のメリットとしては、ペーパーペイシメントでは捉えきれない生きた患者をイメージすることが可能である⁹⁾と言われている。本演習でも、【SPの存在からの学び】で「今まで学生同士で看護師役・患者役を行っていたため返答が予想されたものでリアルなものではなかった」と記述しており、SPの存在は実際の生きた患者をイメージするために有効であったと言えた。そして、【演習環境の評価】では、《ほどよい緊張感》《リアルな体験》があり「実際の患者やその場の雰囲気味わえる良い経験であった」「チューブや点滴など実際に付けてもらっている」などと記載し、実習環境に近い状況を工夫したことを評価していた。SPを導入した演習の学習効果¹⁰⁻¹²⁾と課題が報告¹³⁻¹⁴⁾はされている。本学の演習においても看護診断学の事例との差異、看護師であったことを恐怖と感じている学生もあり、各グループとも同一の患者になりきることの困難さを感じた。

3 今後の「実践看護学演習」の在り方とシミュレーション教育への展望

上記したようにシミュレーション教育の方法は多々ある。本学のシミュレーション教育は、本演習が「実習への導入準備教育」「コミュニケーション能力の強化」を目的として始まったばかりである。しかし、タ

スク・トレーニングの実施等は既にされており現在の看護教育が直面している課題の解決という視点で捉え直しが必要となる。従来の一方向的な知識・技術の伝達という教育方法では、学習者能力・学習意欲の低下という学習者の特徴を踏まえた上で実践力を習得させることに困難が生じることが考えられる。村上¹⁵⁾は、アクティブ・ラーニングの定義を「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（授業的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」と述べている。シミュレーション教育は、アクティブ・ラーニング型授業の1つである¹⁶⁾。シミュレーション教育の中で、シチュエーション・ベースド・トレーニングという学習方法が言われている。これは、患者の状態や置かれている状況を教材とした「シミュレーション」で患者とかかわり（経験）、その後は、シミュレーションでの看護師のかかわりについて、専門的な知識に基づいて仲間とともにディスカッションしながら学んでいく「デブリーフィング」を行う¹⁷⁾という学習の流れである。本演習ではこのシチュエーション・ベースド・トレーニングの学習の流れを踏まえて演習を実施したいと考えている。これは、アクティブ・ラーニングで言うと「個人で事前学習」が内化、「シミュレーション」が体験・観察、「デブリーフィング」が外化にあたる。その実施のためシナリオ（授業計画）が重要である。また、佐々木¹⁸⁾は「シミュレーション教育の効果という点では、教員が特別な研修を受け、ファシリテーターの役割を果たしながら、デブリーフィング、リフレクションを実施することの重要性」を述べている。そのため教員への働きかけも必要となる。

本演習は、3年次生の「領域別実習への導入準備教育」としての役割が大きい。しかし、現在の看護教育が直面する課題の解決のためのカリキュラム全体の充実・教育方法のさらなる検討が必要であると考えられる。

VII まとめ

- 1 A 大学看護学科3年次生の領域別実習の前に実践看護学演習を実施している。その効果について考察した。
- 2 調査対象者は、A 大学看護栄養学部看護学科3年次生54名に自己記述式質問紙調査を実施した。
- 3 調査項目は、筆者が作成した測定項目（演習の自己評価23項目とSPに対する思い16項目）、また、SPを活用するメリット・デメリットへの考えたことの自由記述であった。
- 4 結果は自己評価の分析・SPに対する思いの分析において高得点が得られた。また、SPを活用するこ

とのメリット・デメリットの記述の分析において【SPの存在からの学び】が得られた。

- 5 4より「実践看護学演習」は効果的であり演習の中にSPを導入したことも効果的であったと言える。
- 6 本演習はシミュレーション教育の実施と言え、今後はシチュエーション・ベースド・トレーニングの学習の流れを踏まえた演習を実施したい。また、現在の看護教育が直面する課題の解決のためのカリキュラム全体の充実・教育方法のさらなる検討が必要であると考えられる。

VIII 研究の限界と今後の展望

今回の研究では、54名の学生を対象とした。そのため対象も少なく、結果・考察で述べたことを一般化することは困難である。今後、対象数を増やし、今回の研究成果で示唆されたことを念頭に、学生の学びが多く深くなるような教育の検討が必要である。

謝 辞

調査にご協力いただきました対象者の皆様に心から御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 岡谷恵子：看護学教育のパラダイム転換，看護教育60(9)，600-608，2019
- 2) 阿部幸恵：臨床実践力を育てる！看護のためのシミュレーション教育，56，医学書院2013
- 3) 阿部幸恵，藤野ユリ子：看護基礎教育におけるシミュレーション教育の導入，15，日本看護協会，2018
- 4) 杉森みどり，舟島なをみ：看護教育学 第5版，218，医学書院，2014
- 5) 中村恵子：看護基礎教育におけるOSCE10年の実践と将来への課題，看護教育60(9)，720-725，2019
- 6) 小西美和子：学生の学びをつないでいくためのシミュレーション教育の位置づけ，看護教育54(5)，354-359，2013
- 7) 佐々木幾美：厚生労働科学研究補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）総合研究報告書 看護実践能力の育成に資する効果的な教育方法に関する研究，2，2016
- 8) 前掲書 6)
- 9) 前掲書 6)
- 10) 川島美佐子，富山美佳子，斎藤利恵子他：基礎看護学実習前の模擬患者（Simulated Patient）演習に関する研究（第1報）—基本的コミュニケーション行動への効果—，足利大学看護学研究紀要7(1)，

23-34.2019

- 11) 堀美紀子, 松村千鶴, 陶江七海子: 模擬患者を活用した教育方法の検討 —学生の評価能力の育成に向けて—, 香川県立保健医療大学, 1, 89-96, 2004
- 12) 出原弥和, 辻川真弓, 本田育美他: Simulated Patient を導入したコミュニケーション演習の評価, 三重看護学誌, 8, 93-100, 2006
- 13) 大池美也子, 末次典恵, 山本千恵子他: 医療職教育機関における模擬患者を含むコミュニケーション教育 —平成 16 年度の教育実践から—, 九州大学医学部保健学科紀要, 5, 101-112,

2005

- 14) 玉田雅美, 澁谷幸, 池田清子他: 地域住民ボランティアが参加する看護技術演習の意義 —地域住民の思いと効果—, 神戸市看護大学紀要, 18, 29-38, 2014
- 15) 村上慎一: アクティブ・ラーニングと教授学習パラダイムの転換, 7, 東信堂, 2014,
- 16) 前掲書 15)
- 17) 前掲書 3)
- 18) 前掲書 7)

Discussion on the effectiveness of the practice of practical nursing: Introducing simulated patients

Mariko Sonoda, Mari Fukuoka, Ayami Okuhira, Shouichi Nanakawa

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,
Kagoshima Immaculate Heart University

Keywords: Practice before practical training, effectiveness of practice, introduction of SPs, simulation education

Abstract

Objective: This study aimed to discuss the effectiveness of the practice of practical nursing and how it can be utilized in the following year's practice and practical training.

Methods: A self-administered questionnaire survey was conducted on 54 third-year students in the Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition, University A, three times after practice of practical nursing and after completion of practical training in health recovery support (basic and applied). The survey items consisted of measurement items created by the author (23 items for self-evaluation of the practice and 16 items for thoughts about the simulated patients (SPs)), as well as free descriptions of thoughts on the advantages and disadvantages of utilizing the SPs.

Results and Discussion: Results showed high scores in the analyses of self-evaluation and thoughts on SPs. In addition, in the analysis of descriptions of advantages and disadvantages of utilizing SPs, "learning from the existence of SPs" was obtained. From these results, it can be said that the "practice of practical nursing" was effective, and the introduction of SPs in the practice was also effective. This practice can be regarded as an implementation of simulation education, and we would like to conduct the practice based on the flow of learning in situation-based training in the future. It is also considered necessary to further examine the improvement of the overall curriculum and educational methods in order to solve the issues facing nursing education today.
